

おおさか
KEY
ワード
第29回

華やかなりスミカズカード、スミカズ画の手本

またひとり、大阪の文化芸術の記憶がよみがえる



宇崎純一



「お散歩」



「秋の風物」



「木陰」

“大阪の夢二”を謳われた画家をご存じだろうか。『宵待草』で知られる竹久夢二(1884~1934)——。大正ロマン溢れる美人画を描き、雑誌の小さな挿絵(コマ絵)を集めた『夢二画集』や、絵はがき、「セノオ楽譜」の表紙絵でも人気を博した。夢二のいわば大阪版と言われた画家が宇崎純一(1889~1954)である。難波の書店・波屋書房と関係が深く、明治末から大正時代に一世を風靡したが、戦後ながら忘れられていた。

時代の雰囲気尊重して純一を“スミカズ”と書くことにしよう。スミカズは、父の代に播磨から大阪に移り、難波南海通りで居酒屋、玩具屋などを営んでいたらしい。明治40年代、情感あふれる夢二作品に触発されて描いた「スミカズエハガキ」「スミカズカード」を発行したほか、絵の手本も刊行し、『絵画の手本』『続絵画の手本 森の花』『スミカズ画の手本』『ポケット画手本』などを刊行した。誰もが平易に描けるように簡潔にモノのかたちをとらえ、家庭の日常、仕事やスポーツをする人々をはじめ、こどもたちが喜びそうな動物、昆虫、魚類、植物から飛行機、船、機関車までの確に特徴をとらえ、『北斎漫画』のように多角度から描き分けている。

スミカズが大阪の著名人だったことは、大正14年(1925)、第2次市域拡張で日本最大のマンモス都市“大大阪”になって開催された「大大阪記念博覧会」の中心展示の一つ「女の大阪」の陳列意匠と絵画を担当したことでわかる。これは大阪の女性の百科事典を意味する「大阪婦人のエンサイクロペディア」をテーマとし、「大阪婦人団体の活動」を中心に「大阪の女性史に輝く人々」ほか四つのセクションで成っていた。すでに前年の大正13年(1924)には、創刊されたばかりの川柳雑誌『大大阪』の表紙絵も描いている。

スミカズの作品は、前半は明治期の挿絵とアールヌーボー調を受けた竹久夢二風の“大正ロマン”を意識し、後半は、アールデコ調に転じた都会らしい“昭和モダニズム”風の作品を描いた。昭和の作品には最新の都会風俗をとりあげ、『モガ姫出勤の図』『反モダン婦人』『海水着がだんだん…』『カフェーの女』など、モダンで洒脱な雰囲気を持たせている。

それもそのはず、小説家の藤沢桓夫の証言では、道頓堀の高級喫茶「ライオン」に昼間、顔を出すのが「金持の旦那衆」や「画家など芸術関係の仕事の人」であり、その一人の「口髭を生やして近眼鏡をかけた小太りの人」がスミカズであった。「毎日ディレタント生活を楽しんでいる風」があったという。都会のなかに隠棲しているかのようで時代に鋭敏に反応し、心優しいイラストを描いたユニークな美術家だった。

後に波屋書房を開業し、その経営に携わった弟の宇崎祥二も、「辻馬車」など重要な同人誌の発行元として大阪の近代文学史に名を残している。現在も波屋のブックカバーはスミカズのデザインである。

最近ようやく大阪でも、戦前の爛熟した大阪らしい文化芸術が再認識され、評価されるようになった。平成22年に大阪市立中央図書館で『大正ロマンの画家・スミカズの優しき世界 宇崎純一展』が開催され、今年には堺市の与謝野晶子文芸館で『大阪の夢二 宇崎スミカズと華やかな大阪出版文化』が開かれている。

大阪には、このほかまだまだ再評価されるべき偉人たちが忘れられたまま放置されている。それを正しく評価して顕彰するのが、現代の大阪人たる私たちのつとめだろう。